



1986・春・第27号

Argo アゴラ

鶴見大学図書館報



目 次

父の書齋.....	坂本 育雄.....	1-3
貴重資料紹介 そのXI 古医書に見る医学史6.....	戸出 一郎.....	4-9
新刊アラカルト.....		10-11
図書館だより.....		12

父の書齋

文学部教授 坂本 育雄

私の父は建築家だった。私が中学（旧制）二年生の時、学校で工作という時間があり、ある時小さな本棚を作ることになって、その設計図をかいてくることが宿題となった。私は図面を引いて、一応父に見て貰おうと思った。——ビルディング（尤もその頃の日本では八階建てが限度だった）の設計などを手がけている父に、こんなちゃちな設計図を見せるのは些か恥しかったが、まあ親子だからいいだろうと思ったのだった——父は一寸見て「これじゃあ本がのらないよ」と言っていかに情けなさそうな顔をした。父はこの時息子が自分のあとを継ぐことを断念したに違いなかった。父に見せる前には恥しかったのに、父にこう言われたことが恥しくも悔しくもな

かったのは、今考えてみてまことに不思議なことだった。だが実を言うと私は、自ずからにして自分の進路の方向を決定付け、暗黙の裡にそれを父に認めさせることができたのだと、漠然と乍らそう思ったのである。これは昭和十七、八年の当時としては大変なことだった。なぜなら、中国との戦争が泥沼化し、遂にアメリカ、イギリスとの大戦争に踏み切った日本では、従来認められていた文科系大学生の徴兵延期の措置が廃止になってしまったからである。身に何の技術も有たない者は、ただただ鉄砲をかついで戦場を駆けずり廻ることを覚悟しなければならなかった。私は目をつぶって文科に進もうとひそかに思っていた。

建築家の父の書斎には勿論建築に関する本が並んでいて、それは小さな本棚の設計もできない私とは全く無縁のものとはばかり思えた。しかし私は当時些か美術史というものに興味があり、その点では父の本棚にあった伊東忠太の「日本建築史」が僅かに父と私とを繋ぐせめてもの接点だということがわかった。何しろ今から四十年以上も前の話で記憶が正確でないが、当時は法隆寺の再建非再建問題がまだ論議されていたのではないか。父が非再建説に固執していたのは師の伊東忠太が非再建派だったからのように思える。間違っていたら甚だ申し訳けないが。私としてはとにかく父の私への失望をいくらかでも慰めるつもりでそういう話題に耳を傾けていたように思うのだ。

ところが父の書斎には洋書を含めた建築の本以外に、三種の文学全集が揃って置いてあった。

- A 改造社「現代日本文学全集」62巻
- B 新潮社「世界文学全集」 38巻
- C 春陽堂「明治大正文学全集」60巻

今から考えると、私の生れた昭和三年頃はこれらの文学全集の他にも、「現代長篇小説全集」（新潮社）や「近代劇全集」（第一書房）、「新興文学全集」（平凡社）等々各種の文学全集が、Aの「現代日本文学全集」の大成功に促されて続々刊行されていたのであるが、何とんでもこのABC三種の全集が典型的なものだったのだから、これが揃って書棚を飾っていたのは私にとって良かれ悪しかれ運命的だったといえる。しかし私の記憶では父がこれを読んだ形跡は殆どなかった。要するに父は当時の流行に従って、あるいは一種の見栄から、唯買って、揃えて本棚を麗々しく埋めることを以て能事足れりとしたのであったろう。寧ろ今でも読書好きな母の要請で買い揃えたのかも知れない。父は工学関係では建築が最も文科に近い学問なのだ筈という妙な自負と、母方の一族に漂っていたある

種の「文科」的雰囲気はいくらか劣等感も抱いていたらしいから、母の要請を直ぐ受け容れたのだとも考えられる。しかし何はなくとも膨大な量の百科事典だけは揃えているという家庭風景をよくみかけるが、同じ金をかけるなら文学全集にして貰って、私としては大いに助かったと思う。百科事典の方は直ぐ古くなってしまうが、文学全集なら時間が経てば経つ程値打ちが出てくるからである。

さて、このような文学全集出版の口火を切ったのがAであって、大正十二年の関東大震災後の不況の中、改造社社長の山本実彦が、一か八か社運を賭けて刊行したものであり、「市価十円以上のものが一円で買える」という謳い文句で、事実各巻とも総ルビ六号活字三段組みで、約500ページ、これは相当に読み得のあるものであるから、一冊一円なら購買欲をそそられたに違いないのである。しかもその販売方法は当時としては例のない予約出版というものであり、これが見事に当って刊行後忽ち三十五万部を売り尽くしたというのである。序でに言うと、この総ルビというのが実によかった。私達年代の者はこの総ルビ全集を耽読することで字を覚えたのである。明治から現代まで、200巻でいどの総ルビ文学大全集が出ないものかと夢のようなことを私は願っているのだ。それはともかく、一冊一円ということで「円本」と言われ、BもCも同じく一円だったことから、所謂円本時代というものが、Aの刊行によって到来することになったのである。

善い本を安く読ませる！この標語のもとに我社は出版界の大革命を断行し、特権階級の芸術を全民衆の前に解放した。
一家に一部宛を！

これが改造社版全集が刊行される直前、大正15年10月18日付け朝日新聞に掲載された一ページ広告文の一部である。この全集は第一回配本が「尾崎紅葉集」（大正15・12・3）で以下全62巻の他、別巻大年表を昭和6年12月

に出して終った。Cの「明治大正文学全集」第一回配本（昭2・6・15）が同じく「尾崎紅葉篇」だったことを思うと、当時の尾崎紅葉に対する評価がいかに高かったかが理解される。因みに戦後のこの種の文学全集の最高の達成である筑摩版「現代日本文学全集」では紅葉は、広津柳浪、山田美妙、川上眉山と並んで四分の一冊分しか占めておらず、戦後の文学史的评价が相当に動いたということが、こういった所にも表現されているのである。

A B C三種のうち、最初に読んだのはBの「世界文学全集」第二十巻所収のモオパッサン「女の一生」であった。これは本棚の設計図でミソをつけた同じ中学二年生の時、国語の時間にフロオベルの「一語説」というものを教科書で習った、その説明を波多郁太郎という先生がした。この先生が、私も大学で教わることになる折口信夫という国文学者の高弟だったことをずっと後で知ったが、その時は無論何も知りもしなかった。波多先生はその時ふっと、フロオベルはモオパッサンの先生です、と言われたのである。一語説に感心した私は、早速家に帰って二人のフランス作家を、父の書斎のB全集で探した。するとなるほど師弟らしくフロオベルの「ボヴリイ夫人」とモオパッサンの「女の一生」とが併録されていた。中学二年生の私としてはとにかく「女の一生」という題名の方に魅かれ、父母に隠してこれに読み耽った。当時小説を読むのは非行少年とまでは行かなくても文弱の徒と言われ、大人は誰もこれを奨励しなかった。然るに人間はするなと言われるとしたくなるもので、大人が奨励しない以上、きっとそこには何か秘密の歓楽があるに違いないと私はにらんだのである。私の貧しい人生の経験では、小説を読むことの魅力というものは、恋をする魅力——歎びと苦しみ——と全く同じものだった。否、現実における恋の体験も、ワイルドではないが実は小説の中の恋を模倣したものに過ぎなかっただろう。「女の一生」

にはおまけに伏字が多かった。私は大人の読むものにすら、読ますべからずとして伏字にする「お上」の悪意とたくらみのようなものを感じとり、激しくそれを憎悪した。因みに言うと、この「女の一生」は広津和郎の訳したもので、広津はこれを英訳から訳したのである。広津は早く大正二年と七年に「女の一生」を訳して出版しており、この全集のものは彼として三度目のものである。しかし当時の私は訳者のことなど全く気にならなかった。今、私は広津和郎という作家をいくらか研究しているが、私の文学的出発に広津が関わっていたというのは不思議な因縁だと思っている。今一つつけ加えておきたいのは、私が真実文学的感動を覚えたのは「女の一生」より寧ろ同じ巻にあった「脂肪の塊」の方で、私の生涯の文学観はもしかするとこの作によって底の底から養われただろうと思っている——

Cの「明治大正文学全集」で最も伏字が多かったのは森田草平の「輪廻」（第二十九巻）だったと記憶している。この作は森田の最高傑作であるが、戦後直ぐ出た飛鳥書店版で伏字が起されている。それを読んだ時、この程度のものがなぜ戦前伏字になったのか、とお上への憎悪を改めて感じたものである。しかしこういう文化への冒瀆の姿勢が戦後でも基本的に変わっていないのは、「チャタレイ夫人の恋人」「四畳半襖の下張」裁判でも明らかにされた通りである。

戦前の中学では朝礼の時、不意に持ちもの検査という人権を無視した野蛮なことが行われた。ポケットの中に煙草をしのばせていると呼び出されて配属将校に殴られ、一週間の停学をくらった。小説本がみつかり没収されたが、ある時私は斎藤茂吉の「万葉秀歌」を持っていて、どういう処分を受けるかと恐る恐る検察教師の顔色を窺ったが、不問に付された。多分万葉集には「大君の辺にこそ死なめ」杯という歌があるからお咎めを受けな（以下11頁につづく）

古医書に見る医学史 6 西洋医学（蘭学）2

歯学部非常勤講師 戸出 一郎

〔外科学〕

60. 繙縛図式 1巻1冊
大槻茂楨（磐里）著 文化10（1813）序刊
61. 瘍医新書 誘導篇 3巻 首1巻4冊
協乙速の盧〔ハイステル（独）〕著撰
〔ウルホルン（蘭）訳〕 杉田玄白起業
大槻玄沢重訳 文政8（1825）江戸
須原屋伊八 京 出雲寺文次郎刊



61. 瘍医新書 誘導篇 見返と序

大槻玄沢が師の杉田玄白の遺命により、ドイツの外科医ハイステルの外科書のうち外科誘導篇を重訳したもの。外科諸学入門の規則から、治療法、外科器械、包帯など基礎的問題を述べている。

62. 外科医法 9巻9冊
斯篤魯黒兒〔ストロメール（独）〕著
シュエルマン（蘭）訳 佐藤尚中重訳
慶応元（1865）江戸 嶋村屋利助 山城屋佐兵衛刊

シュエルマンが蘭訳した外科学書で、安政4年幕府に招聘されて来日した蘭医ボンペは、長崎の伝習所で本書を用いて外科学の講義をした。尚中もその講筵には

べり、別れにあたってボンペから原書をもらった。尚中はこれを訳し我国外科学の発展に大きく貢献した。

63. 切断要法 1巻1冊
田代子栄（基徳）纂輯 慶応4（1868）
東京 島村屋利助 山城屋佐兵衛刊
64. 外科手術 2巻2冊
田代基徳纂輯 明治6（1873）東京
島村利助刊 隆々亭蔵版
65. 外科説約 巻1－8、8冊
石黒忠恵纂述 明治6（1873）序 東京
島村利助刊 読我書屋蔵版 12巻欠
66. 外科通論 25巻25冊
佐藤進講義 門人筆記 明治13（1880）
東京 佐藤尚中刊

佐藤進は佐藤尚中の養嗣で、ウィーンのパルロートに外科学を学び、師の著書「外科総論」を基礎として東京大学で講義をした。本書は門人が筆記したもので、外科の病理と治療の総論である。

〔産婦人科学〕

67. 婦人病論 6巻6冊
普欽幾〔プレッキ（奥）〕著 船曳徳夫
述 嘉永3（1850）京 若山屋茂助等
刊
68. 婦嬰新説 2巻2冊
合信〔ホブソン（英）〕 管茂材（清）
撰 江戸末期 江戸 万屋兵四郎刊
咸豊8（1858）上海仁齋医館刊本の翻刻
桃樹園三宅氏蔵版
69. 日講記聞産科論 2巻2冊
越爾蔑噠斯〔エルメレンス（蘭）〕口授
高橋正純口訳 大川涉吉録 明治8
（1875）序刊 大阪公立病院蔵版

70. 造化生々新論 2巻2冊
古矢嘉満子記 田代基徳関 明治12
(1879) 東京 内田弥兵衛刊 正栄堂
蔵版
71. 婦人科論 巻1、1冊
桜井郁次郎編 明治14 (1881) 序 東京
桜井郁次郎刊 (活版) 3巻欠
72. 産婦備用 洋本1冊
パイペル (独) 著 賀古鶴所訳補 明治
20 (1887) 東京 後凋閣刊 (活版)

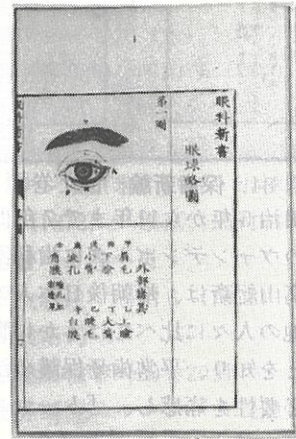
〔皮膚科学〕

73. 黴瘡新書 5巻5冊
布連吉〔プレんキ (奥)〕著 蔑旃別兒
杭〔ワッセンベルク (蘭)〕 諾兒斯咄
〔ノルスト (蘭)〕 訳 杉田立卿訳述
青地林宗校正 文政4 (1821) 江戸
須原屋茂兵衛等刊 天真楼蔵版
梅毒が伝染病であること、アメリカよ
り伝来したものであることを述べており、
当時の最高水準の性病学書が我国に紹介
された点でその意義は大きい。症状、治
療法 (水銀剤の使用)、予防法に及び妊
婦・小児の梅毒、潜伏梅毒に至る。
74. 黴療新法 2巻2冊
新頓〔ニュートン (英)〕 述 萩野大見
関 明治4 (1871) 刊 尚古書屋蔵版
75. 皮膚新編 1巻1冊
嘉約翰〔ケルジオン (米)〕 口訳 林湘
東筆述 明治8 (1875) 東京 清水卯
三郎刊
76. 黴毒小纂 1巻1冊
設孟斯〔セモス (米)〕 講述 近藤薫筆
記 松山棟庵関 明治9 (1876) 東京
島村利助刊
77. 治梅新説 1巻1冊
桜井郁次郎著 明治10 (1877) 東京
島村利助刊
78. 治癩新論 洋本1冊
小林広著 明治17 (1884) 東京 島村

利助刊 (活版)

〔眼科学〕

79. 眼科新書 5巻5冊
プレんキ (奥) 著 プロイス (蘭) 訳
杉田立卿訳述 文化12 (1815) 序刊
群玉堂蔵版



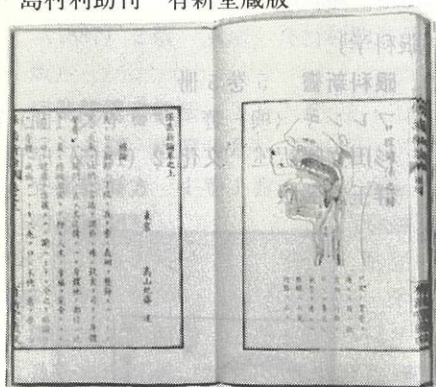
79. 眼科新書 図

80. 眼科新書附録 1巻1冊
松田芹齋輯録 杉田錦腸検関 文化13
(1816) 大阪 河内屋茂兵衛等刊
広文堂蔵版
81. 眼科摘要 9巻9冊
朋百〔ポンペ (蘭)〕 鈔 倉次元意訳
佐藤舜海関 明治2 (1869) 東京
鳴村屋利助刊 臨湖山房蔵版
82. 須准氏眼科必携 11巻11冊
須准歌児 (独) 原撰 阪井直常訳補
明治9-12 (1876-1879) 東京 島村
利助刊

〔歯科学〕

83. 齒乃養生法 洋本1冊
ホワイト (米) 著 桐村克己訳 小幡英
之助関 明治12 (1879) 東京 桐村克
己刊 (活版)
我国における歯学専門書の嚆矢である。
84. 保齒新論 2巻2冊

高山紀斎述 明治14 (1881) 東京
島村利助刊 有新堂蔵版



84. 保歯新論 図と巻頭

明治5年から11年まで7年間、アメリカのヴァンデンボルグに歯科医学を学んだ高山紀斎は、帰朝後日本人の歯牙が彼の地の人々に比べてはるかに脆弱であることを知り、平常歯牙保護の法を示す書の必要性を痛感し、「トーマス氏比較解剖書」「オーウン氏歯牙論」「カーレットソン氏口科全書」「ハーレイ氏口内外科書」及び「オーハア氏、ガブレイ氏の歯病書」などを参照して一書を成し、「保歯新論」と名づけて出版した。

本書は歯牙解剖、発生、歯牙変形と欠損、歯列不正、歯石、齲蝕、抜歯、口腔衛生、治法、義歯、鉄漿論（これの療止を説く）を簡略に述べている。歯科概論というべき書物で、専門技術的なことは記されていない。

85. 歯の養生 洋本1冊

高山紀斎述 明治15 (1882) 刊同35
(1902) 5版 東京 高山紀斎刊 (活版)

〔衛生学〕

86. 衛生新論 2巻2冊

緒方惟準纂輯 明治5 (1872) 序 東京
稲田佐兵衛等刊 適適斎蔵版

87. 養生法 1巻2冊

松本良順 (順) 誌 山内豊城校閲補註

明治初期 東京 島村利助刊

〔法医学〕

88. 裁判医学 洋本1冊

デーニッツ (独) 講義 明治初期刊
(活版)

〔薬物学〕

89. 遠西医方名物考 36巻36冊

宇田川榛斎訳述 宇田川裕庵校補 文政
5-8 (1822-1825) 江戸 須原屋伊
八刊 風雲堂蔵版



89. 遠西医方名物考 巻頭と図

アムステルダム、ライデン、バタビアの薬局方に載る薬物をあげ、その産地、形状、性味、主療を記し、その数800種に及ぶ。

90. 遠西医方名物考補遺 9巻9冊

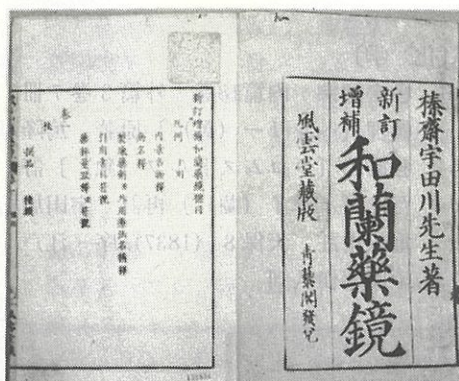
宇田川榛斎訳述 宇田川裕庵校補
〔天保6 (1835) 〕 江戸 須原屋伊八
刊 風雲堂蔵版

91. 新訂増補和蘭薬鏡 18巻16冊

宇田川榛斎訳述 宇田川裕庵校補 文政
11 (1828) 序 江戸 須原屋伊八刊
風雲堂蔵版

宇田川榛斎はオランダの薬物学書、本草書、治療書など20余種を訳し、和漢の説に照して確実な薬品を選び、その形状、

主治、驗方、藥劑などを類纂し「和蘭藥鏡」と題して出版した。これによって我国の医学は、西洋医学が諸物を分析して有効成分を取り出して薬とすること、また薬物の性質により色々の剤形にすることを知った。



91. 新訂増補和蘭藥鏡 見返と目次

本書は榛齋の養嗣裕庵が「和蘭藥鏡」を校補した書である。即ち前書の冗をはぶいて簡明化し、併せて西洋近來の経験發明を増補したもので、内容が大いに良くなっている。「遠西医方名物考」と本書が世に出て我国の薬物学は確立した。

92. 窠篤兒藥性論 21巻18冊
窠篤兒〔ワートル (蘭)〕著 普勒歇〔プラッヘ (蘭)〕校補 林洞海訳補
安政3 (1856) 江戸 嶋村屋利助等刊
93. 医家必携 3巻3冊
堀内忠亮輯 安政4 (1857) 序 江戸 須原屋伊八 須原屋茂兵衛刊 日涉園蔵版
94. 七新藥 6巻3冊
司馬凌海著 関寛斎校 文久2 (1862) 大阪 秋田屋太右衛門等刊 尚新堂蔵版
95. 新藥百品考 2編各2巻4冊
歇儼貌廉涅兒 (独) 著 坪井信良訳述 慶応2 (1866) 江戸 嶋村屋利助刊
96. 實藥鑑法 1巻1冊 附録伍藥禁忌 結爾別兒篤〔ヘルベルト (蘭)〕撰
石黒忠恵訳補 明治2 (1869) 序 東京 島村利助刊
97. 袖珍藥説 3巻3冊
慧蘊〔ウェーゼス (米)〕編 桑田衡平訳 柳河春蔭閱 明治3 (1870) 東京 島村屋利助 紀伊国屋源兵衛刊 鉄幹齋蔵版
98. 袖珍藥説 3巻1冊
慧蘊〔ウェーゼス (米)〕編 桑田衡平訳 柳河春蔭閱 明治3 (1870) 東京 島村利助等刊 鉄幹齋蔵版
99. 理札氏薬物学 5巻5冊
理札〔リレイ (米)〕著 小林義直訳述 明治5 (1872) 東京 島村利助刊
100. 藥劑新書 2巻2冊
森鼻宗次訳述 明治6 (1873) 大阪 松村九兵衛刊
101. 日講記聞薬物学 20巻20冊
越兒蔑唎斯〔エルメレンス (蘭)〕講述 岡沢貞一郎訳 明治6 (1873) 序 大阪 大阪府病院刊
102. 西藥略釈 2巻2冊
内田嘉一訓点 明治7 (1874) 東京 自由存處刊 羊城博濟医局原版
103. 鑑藥精義 3巻3冊
石塚左玄纂 明治9 (1876) 刊 陸軍文庫蔵版
104. 藥譜心得草 3編3冊
太田雄寧著 明治9-10 (1876-1877) 東京 島村利助刊
105. 新纂薬物学 6巻1冊
檜村清徳纂輯 藁科松伯校訂 明治10 (1877) 東京 島村利助刊 格致学舎蔵版
1. 講筵筆記薬用動物篇 2巻2冊
松原新之助講義 安本徳寛筆記 明治11 (1878) 東京 島村利助刊
107. 毒物学 (毒物新論) 2巻2冊
大井玄洞著 明治12 (1879) 東京 丸屋善七 島村利助刊 廻春堂蔵版

108. 増訂新薬纂論 洋本 1 冊
青木純造 小此木信六郎訳補 明治20
(1887) 2 版 東京 島村利助等刊 (活
版)
109. 阿蘭陀医書秘伝 1 巻 1 冊
江戸末期 中原長允写
110. 売薬製剤方 1 巻 1 冊
明治初期写

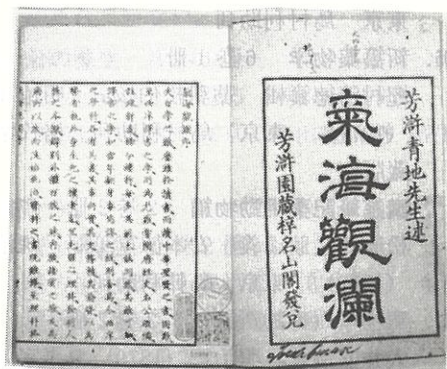
〔辞 書〕

111. 漢洋病名対照録 2 巻 1 冊
落合泰蔵纂著 明治16 (1883) 東京
島村利助刊 (活版)
112. 漢洋病名対照録 2 巻 1 冊
落合泰蔵纂著 明治21 (1888) 3 版
島村利助刊 (活版)
113. 袖珍医学辞典 洋本 1 冊
伊地知英太郎 新宮涼園纂輯 明治19
(1886) 東京 伊東誠之堂刊 (活版)

〔定期刊行物〕

114. 順天堂医事雑誌 巻 1、1 冊
明治 8 (1875) 東京 島村利助刊
順天堂蔵版
口蓋欠縫綴術治験の記事が散見され、
我国における西洋流の口腔外科手術の記
録としては嚆矢と思われる。

〔物理学〕

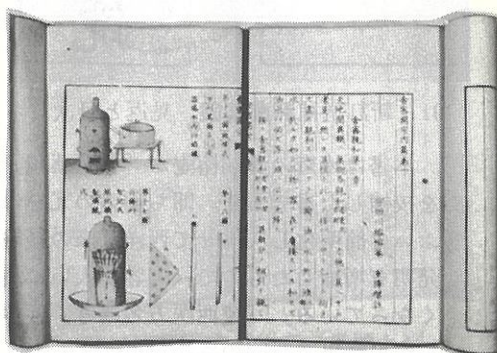


115. 気海観瀾 見返と序

115. 気海観瀾 1 巻 1 冊
青地林宗編訳 文政10 (1827) 序 江戸
和泉屋吉兵衛刊
116. 改正増補物理階梯 3 巻 3 冊
片山淳吉纂輯 明治 9 (1876) 東京
山中市兵衛刊 文部省蔵版

〔化 学〕

117. 舎密開宗 内篇18巻 外篇 3 巻 7 冊
賢理〔ヘンリー (英)〕原著 篤隆母斯
独爾弗〔トロムスドルフ (独)〕訂 依
百乙〔イペイ (蘭)〕再訂 宇田川榕庵
重訳増註 天保 8 (1837) 序 江戸
須原屋伊八刊



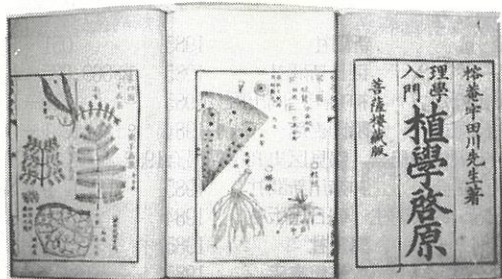
117. 舎密開宗 巻頭と図

宇田川榕庵は医学の基礎科学たる理学
に深く没入し、西洋近代植物学や化学の
研究に没頭した。本書はイギリス人W.ヘ
ンリーのAn epitome of chemistry, 2d
ed. (1801) の蘭訳本を軸とし、これに
ラヴォアジェはじめ24種の化学・薬学書
を援用して編纂したものである。

本書の出版によって我国にはじめて化
学が大系的かつ正確に紹介され、化学用
語の大系を確実に日本語に移し、化学的
事実や操作が平易明晰な文章で表された。
本書が幕末期のみならず今日に至るまで
我国の自然科学にもたらせた貢献は誠に
大きいものである。

118. 秘事新書 1巻1冊
 点林堂主人(本木昌造)著 慶応4
 (1868) 大阪 秋田屋太右衛門等刊
 [博物学]

119. 植学啓原 3巻3冊
 宇田川榕庵著 天保8(1837) 江戸
 須原屋伊八等刊 菩薩楼蔵版



119. 植学啓原 見返と図

初版は天保5年(1834)に1冊本で刊行された。我国初の本格的西洋植物学の紹介書。序では、植物学と本草とははっきり区別し、植物学は物の道理や法則を調べる学問であることを強調している。また、リンネの植物分類などもはじめて紹介されている。

120. 博物新編 3集3冊
 合信〔ホブソン(英)〕著 明治5
 (1872) 再版 東京 万屋兵四郎刊
121. 植物小学 2巻2冊
 松村任三纂訳 伊東圭介校閲 明治15
 (1882) 再版 東京 石川治兵衛 大阪
 松本駒次郎刊

3年間にわたって連載した貴重資料紹介はいよいよ本号をもって終了する。

この資料は1970年本学歯学部が開設されたとき、他の書物とともに一括して購入されたものに若干の補充を加えて成ったものである。

資料の内容は鍼灸・漢方・本草・蘭学の多方面におよび、江戸初期から明治初年に至る間に出版されたものである。

我国の医学は、奈良・平安の昔から江戸末

期に至るまで、中国伝統医学いわゆる漢方医学を手本としてきた。

漢方医学は漢代に編纂された「黄帝内経素問、靈枢」「傷寒論」「金匱要略」「神農本草経」に端を発し、漢代から清末に至るまで発展と変貌をくりかえしてきたが、これが我国の医学に与えた影響は誠に甚大であった。とはいえ、我国人はこれに流されることなく、これを持ちこえて、江戸中期には真に日本の医学を創造し得たのである。

この成功にもかかわらず我国の医人達は更に進歩の歩みを止めなかった。蘭学という世界に例のない文化様式によってヨーロッパ医学を取り入れ、更に世界的規模の医学へ飛躍する努力をつづけたのである。

この間の経緯を物語る資料はことごとく本学図書館に所蔵されている。3年間にわたって紹介した貴重資料がその中核をなすものである。

稿を終るに臨み、大量の貴重書を購入し整備された創始者の先生方、図書館の皆様方に心から敬意を表したい。

ただ惜しむらくは筆者の力量不足のため、十分貴重資料紹介の意をつくすことができなかったことは汗顔の至りである。若し一片の著使すべきものがあるとすれば、それは本学図書館の吉田道彦、飯島弥栄子両氏をはじめ職員の皆様による扶援の賜である。

貴重資料紹介 古医書にみる医学史1～6

1. 総説と鍼灸……………(1983・秋・第17号)
2. 漢方(1) 傷寒論と金匱要略
……………(1984・春・第19号)
3. 漢方(2) 宋以降及び日本
……………(1985・冬・第22号)
4. 本草学……………(1985・春・第23号)
5. 西洋医学(蘭学) 1
……………(1986・冬・第26号)
6. 西洋医学(蘭学) 2
……………(1986・春・第27号)

新刊ア・ラ・カルト

書 名 (叢 書 名) 著 者 出 版 社 出版年 請求記号

《人文科学関係図書》

雑誌で読む戦後史 (新潮選書)	木本至	新潮社	1985	051-K
ユニーク博物館 日本全国ミュージアム・カタログ		毎日新聞社	1985	⑩ 069.035-U
かながわの史話 100選 全2巻 (かもめ文庫)	南原幹雄ほか	神奈川合同出版	1985	K-K
横浜山手外人墓地 (写真で綴る文化シリーズ 神奈川) 生出恵哉		暁印書館	1984	K 1-O
鶴見区史 区制施行五十周年記念	鶴見区史編集委員会	鶴見区史刊行委員会	1982	K 1-Y
西さがみハイク (かなしんブックス)	小田原山岳会	神奈川新聞社	1985	K 9-N
「対話」はいつ、どこでも プラントン講義	斎藤忍随・後藤明生	朝日出版社	1984	131.3-S
「ひらめき」の開発 (講談社現代新書)	千葉康則	講談社	1985	141.5-C
イメージの博物館	山下主一郎	大修館書店	1985	162.3-Y
ギリシア神話 西欧文化の源流へ	丹羽隆子	大修館書店	1985	162.31-N
幸福な死に方とは	中村元ほか	平凡社	1983	181-K
図説大聖書	A.フロツサルほか	講談社	1984	193.08-B
横須賀製鉄所の人びと 花ひらくフランス文化	富田仁・西堀昭	有隣堂	1983	210.59-T
江戸東京歴史読本	小森隆吉	弘文堂	1984	213.6-K
ミューケーナイ世界	J.チャドウィック	みすず書房	1983	231-C
イギリス人の故郷	川成洋・石原孝哉	三修社	1984	293.309-K
ライン河の文化史	小塩節	東洋経済新報社	1982	293.4-O
ロシアの心・ロシアの風景 (NHKブックス)	木村浩	日本放送出版協会	1984	293.8-K
聖書美術館 全5巻【刊行中】	尚文社	毎日新聞社	1985	702.099-S
池田満寿夫推理ドキュメント これが写実だ	池田満寿夫	日本放送出版協会	1984	721.8-T
ヴィジュアル・コミュニケーションの歴史	W.アイヴィンス	晶文社	1984	732-I
土門拳全集 全13巻	土門拳	小学館	1983-85	748-D
折り紙建築型紙集	茶谷正洋	彰国社	1984	754.9-C
人間と音楽の歴史 全20巻【刊行中】		音楽之友社	1985	762.08-N
音楽史の中の女たち なぜ女流作曲家は生まれなかったのか E.リーガー 思索社			1985	762.34-R
パソコンミュージック入門 (Blue Backs)	矢矧晴一郎	講談社	1985	763.9-Y
マーゴ・フォンテン自伝 愛と追憶の舞	マーゴ・フォンテン	文化出版局	1983	769.33-F
映画、わが自由の幻想	L.ブニエール	早川書房	1984	778.236-B
ことばの世界	藤田実・平田達治	大修館書店	1985	804-K
文学の受容 現代批評の戦略	富原芳彰ほか	研究社出版	1985	901-B
星の帆船 (幻の絵本館)	W.M.ティムリン	立風書房	1982	908-M
文学における「向う側」	国文学研究資料館	明治書院	1985	910.26-B
孤独地獄 森鷗外	吉野俊彦	PHP研究所	1985	913.6-M99-Y
歴史の斜面に立つ女たち	奥野健男	毎日新聞社	1985	914.6-O17
数の文学	鈴木修次	東京書籍	1983	920.4-S
現代英米文学の意匠	鈴木幸夫	東京堂出版	1982	930.14-S
言葉の背景 辞書と英文学	吉川道夫	研究社出版	1984	930.14-Y
シェイクスピアの音楽	有村祐輔・吉田正俊	大修館書店	1985	932.7-A
ドクター・ジョンソン名言集	永嶋大典	大修館書店	1984	936.1-N
「ニューヨーカー」物語	B.ギル	新潮社	1985	930.24-G
アメリカに学ぶこと パール・バックの人生論	石垣綾子	岩波書店	1985	934.0-B24-I
ゲーテとの邂逅 没後150年記念企画論文集	半田恭雄ほか	三修社	1984	940.28-G

書 名 (叢 書 名)	著 者	出 版 社	出版年	請求記号
グリム兄弟・童話と生涯	高橋健二	小学館	1984	940.28-G
ラ・ジャポネーズ キク・ヤマタの一生	矢島翠	潮出版社	1983	950.28-Y
フランス文学とわたし	生島遼一ほか	平凡社	1985	950.4-F
チェーホフのなかの日本	中本信幸	大和書房	1981	980.28-C

《社会科学関係図書》

ペーパーレス入門 新しい情報整理術	安田賀計	ぎょうせい	1984	336.5-P
家族の時代 ヨーロッパと日本 (新潮選書)	木村尚三郎	新潮社	1985	361.4-K
女たちのヨーロッパ	横村久子	勁草書房	1984	367.23-M
現代の教育課題と教師の責任	木川達爾	ぎょうせい	1985	370.4-K
教師と生徒の人間関係 新しい教育指導の原点	J.E.プロフィ・T.L.グッド	北大路書房	1985	371.4-B
子供 10歳から15歳を中心に 174人の子供たちが語る	スタジオ・アヌー	晶文社	1985	371.45-K
こども文化の原像 文化人類学的視点から	岩田慶治	日本放送出版協会	1985	371.45-K
知能は測れるのか IQ討論	H.J.アイゼンク・L.ケイミン	筑摩書房	1985	371.8-E
ベスタロッシーの直感のABCの理念	ヘルベルト	玉川大学出版部	1982	372.345-P
手づくり遊び 全10巻		同朋舎出版	1985	376.157-T

《自然科学関係図書》

科学の歴史	21世紀科学教育懇談会	日本IBM	1985	402-K
ノーベル賞の発想 (朝日選書)	三浦賢一	朝日新聞社	1985	402-M
ゲーテル、エッシャー、バウハ あるいは不思議の環	D.R.ホフスタッター	白揚社	1985	410.11-H
医学マイコン・シリーズ 全9巻		南江堂	1983-84	490.708-I
エイズ 世界最初のAIDSシンポジウムの克明報告	C.M.カーヒル	ダイナミックセラーズ	1984	491.8-A
日本のターミナル・ケア 末期医療学の実践	池見西次郎・永田勝太郎	誠信書房	1984	492.9-N
図説子どもの発達と障害 全15巻		同朋舎出版	1983-84	493.908-Z
栄養食品と健康食品の縮図	田村豊幸	クインテッセンス出版	1984	498.3-T
先端技術 全5巻	筑波先端技術研究会	ラボネート	1983-84	504-S
様式創造の試み 建築文化論と保存の図集	村松貞次郎	文唱堂	1984	521-Y
第五世代コンピュータ	元岡達・喜連川優	岩波書店	1984	548.2-M
原典現代語訳 日本料理秘伝集成 全19巻		同朋舎出版	1985	596.1108-N

かったのだろう。しかし万葉集には猛烈な恋愛歌が沢山あるではないか、と私は大人の形式主義を嗤うことで僅かにひごろの野蛮な政策に鬱憤を晴らしていた。——今考えても、特にBとCの、あのくすんだ表紙の文学全集程、少年期の私の胸を怪しく轟かしたものはなかった。それをひそかに耽読することは、お上による文化への様々な野蛮な干渉に対するせめてもの抵抗だった。しかし昭和二十年五月の大空襲で私の家は焼け落ち、三種の文学全集も悉く灰と化した。戦争に負けて暫くしてから、私は神田の古本屋からAとCとを買い求めたが、Bは遂に手に入らなかった。

今日発行される世界文学全集の類には、どういふわけか日本の近代文学に影響を与えた西欧作家のものが殆ど採録されていない。ストリンドベリ、ゾーデルマン (岩波文庫で今度漸く「憂愁夫人」の新訳が出た。これはBで読んだもののうちで私の最も愛した作品である)、ハウプトマン、シュニツラー、ヴェデキント——こういう作家のものを今一度Bで読んでみたいと思う。Bは本学図書館にも所蔵されているが今は閲覧できない。新図書館完成の暁には書棚に飾られるそうだ。その日の早からんことを願っているものである。

図書館だより

◎閉館日のお知らせ

本館

5月31日(土) 月末閉館日
 6月16日(月) }
 } 新館移転作業
 7月12日(土) }

別館

5月31日(土) 月末閉館日
 6月23日(月) }
 } 新館移転作業
 7月12日(土) }

※7月14日(月)から、本館、別館とも新館へ移る予定です。

◎新館の閉館日と開館時間変更のお知らせ

7月14日(月) } 一部開館
 } 平 日 9:00~15:30
 8月9日(土) } 土曜日 9:00~13:00
 8月11日(月) }
 } 閉館
 8月16日(土) }
 8月18日(月) } 一部開館
 } 平 日 9:00~15:30
 9月6日(土) } 土曜日 9:00~13:00

※9月8日(月)より全館平常開館します。

平 日 9:00~19:00
 土曜日 9:00~16:00

◎夏休みの特別貸出について

学生の貸出

冊数 4冊(一夜貸出を含む)
 期間 貸出開始 6月9日(月)から
 返却期限 9月12日(金)まで

教職員の貸出、卒論貸出

冊数 教職員10冊
 卒 論5冊
 期間 6月9日(月)~8月9日(土)
 に貸出する図書の返却日は9月13日(土)まで

図書館学講習生の貸出

冊数 1冊
 期間 1週間

※貸出開始 7月14日(月)

◎編集後記：新入生を迎え、学園内に爽やかな緊張感が漲ぎ、春はやはり1年のうちで最もいい季節である。更に新図書館の建築も順調に進んで、あと何ヶ月で引越しなどと考えるとよけいその感を強くする。「アゴラ」も今年度は新図書館開館に照準を合わせて計画してみた。春号、冬号は従来通りだが、夏号、秋号は合併して9月8日の新図書館全面開館と同日刊行の予定である。移転作業も計りきれないところがあり、春号でお知らせした閉館日に多少の変更があるかも知れないことを、あらかじめお断りしておきたい。

◎昭和60年度編集委員 (第27号~30号)

飯島弥栄子 八城千賀子 樋川清司
 近藤茂 吉田千登世

アゴラ——鶴見大学図書館報—— 第27号 1986年5月10日発行
 鶴見大学図書館発行(館長 池田利夫) 〒230横浜市鶴見区鶴見2-1-3 045-581-1001